



ほしいもの
役立つものが
必ず見つかる

かわらばん 第122号
2021年5月号

カタログご請求ください。

土を育てる有機肥料 土をダメにする化学肥料 その結果が…

- 「葉が黒くなる」「葉が硬くなる」「葉が巻く」「葉がタレ下がる」
どこか無理があり、イキイキと育たない。
- 「幹が太らない」「葉が大きにならない」など思うように育たない。
- 「根張りが今イチ」「根いたみ。根ぐされが出る」など根の故障がでた。
- 「花弁が硬い」「花の乱れがでる」「花が肥大しない」など花への悪影響がでた。

こんな問題が起きなければイイ花が咲くのに……
思いあたるところはありませんか…
ここを乗り越えないのは「菊づくり技術」そのものではありません。
土づくりや肥料の選定に問題がある場合が大半です。
“土はよくできた”しかし、化学肥料で育てたのでは
やがて土は荒廃し、根張りや根の働きが悪くなり、
育てる力の弱い土に変わってしまいます。

“肥料は良かった”しかし土がうまくいかなかった為に
肥料の力が生かせなかった。
こうした気がつきにくいところに問題が発生し、思い描く菊づくりに成らないことが普通に起きてしまいます。
しかし、この壁を乗り越えれば「イイ花が咲く」ということであると思います。
この壁を乗り越えるには「生きた土づくりと有機肥料」をおすすめいたします。

生きた土づくりとは…

「有益微生物が十分に増殖していること」「リン酸の補給ができていること」「完熟した腐葉土を使用していること」この様な土は 通気性・排水性・保水力・保肥力など土の物理性に優れ、根の伸長や根張、根の活力が高まり、肥料や水の吸収がよく、力強く生育をする土です。

悪い土とは、「未熟な腐葉土の使用」「有益微生物の増殖が悪く、病原菌の発生した土」「チッ素が多すぎ、リン酸の不足した土」などです。
悪い条件が単独で発生することは少なく、重なって発生する 경우가ほとんどです。

有機肥料が最善 …化学肥料を使う手はない

肥料は大別すると有機肥料と化学肥料に大別されます。
菊づくりに於いては、有機肥料でなくては“イイ花は咲かない”とまで言われています。
上質な肥料とは固型のものは、乾燥肥料であり、有機質肥料を材料に“発酵熟成”をした肥料です。
液体肥料は、アミノ酸を主体としたものです。
有機肥料は自然界の天然物であり、植物が最も好んで吸収利用する成分です。
無理なく効率よく生育・肥大に利用できるバランスの良い栄養分です。
さらに土中微生物の栄養源として働き、増殖や活動を活発にし、アミノ酸、ビタミン、ミネラル、酵素など多

種多様な栄養分を供給します。
これらの「有機質肥料」特有の栄養分は植物体内の酵素を活性化し、免疫力を高め体質を強化、活性化する為、力強くイキイキと生長させることができる栄養分です。
一方、化学肥料は菊の生長に必要な成分の極一部肥料要素しか配合ができない為、健全な生育は元々望めないものです。
しかも、生長を促す成分の他、副成分として、根を苦しめ、根張りを阻害する成分が含まれています。
最初に「菊づくりで発生してほしくない」症状を記してありますが、この原因は科学肥料に起因することがほとんどです。

良質な培養土に
上質な有機肥料を
使用することは
菊づくりには
極めて重要です。



スプレー菊 親株生育状況

おためしください。優秀花の近道です。他に選択の余地はありますか…



親株の育て方とサシ終わった後の管理

苗づくりは“苗半作”と言われるように非常に重要です。

“サシ芽”の方法は「かわらばん 116 号」で紹介いたしました。今回は親株を育て、サシ穂を取るまで、さらに、サシ終わった後の水掛けや置く場所・日除けなどを説明いたします。



従来“サシ芽”はサシ穂の調整、水上げをして、ポット（やサシ芽箱）にサシ終わるまでの過程を主に説明がされてきたように思います。

これは“サシ芽”の象徴的な部分ではありますが、すべてではありません。

実際には「よい冬至芽の発生を

促し、よい親株を育てる」。この準備は花が終わった秋から始まっています。

また、サシ終わった後の発根を促し、根量を増し、生長力の強い苗づくりをするには、どうしたら良いのか、置く場所・水管理など、考える余地はまだあります。

親株及びサシ穂の育て方

冬至芽の発生までの間は十分に（最低1ヶ月以上）寒さに当てる必要があります。こうしないと勢いのよい冬至芽が発生しません。冬至芽の発生時期は地方により異なり、当然、親株の管理方法は変わってきます。成り行き状態でサシ穂を取ることは避けなくてはなりません。

（よくある例：盆養のサシ芽を取る。次にその側枝を、ダルマのサシ穂に取る。さらにその側枝を福助に使用する。……これは最悪の例です）

サシ穂を育てる方法は「発生した冬至芽をすべて地

際で切り取り伸びた芽を選別し、サシ穂に使う」、「発生した冬至芽の内、強い芽のみ残し、これを育て適切な位置で摘芯をし、側枝を育てサシ穂にする」この場合もすべての側枝を育てるのではなく、強い側枝を厳選して育てることが充実したよいサシ穂を取る方法です。この方法がすべてではないかも知れません。

いずれの方法でも肥料切れが発生しないように与えます。こうして充実した優良なサシ穂を育てることは、よい花を咲かせる為には何より重要です。



ピーナインを使用すれば3枚分の長さ、葉を5～6枚つけても長さはあまり変わらない。



さらに充実したよいサシ穂を取る為に … ピーナインで処理し節間は詰まり気味に育てる

サシ穂を育てる時にピーナイン（うすい倍率）で節間を少しツメて育てます。充実した使いやすいサシ穂となる為です。（穂を取る20日くらい前が目安）

さらにサシ穂を取る一週間前に700～800倍のピーナインを散布します。節間を詰め、天・地・人の枝の段差を少なくしておきます。

この段差が大きすぎると三枝の伸び方に差が出やすくなります。

天と人の差は2センチ以内が目安です。

（植物の枝は頂芽優先の法則があり上位の枝が伸びやすく、下位の枝は伸びにくい）日照不足などにより

軟弱な生育をする場合は「リン酸を効かせ（2～3日前にPグリーン500～600倍の葉面散布）充実した、しまりのあるサシ穂に改善し、その後にサシ穂にすることが最善です。

軟弱なサシ穂は、萎れやすい、発根が遅れる、くさりやすいなどの問題が発生します。できることなら使用しないことをおすすめします。

どうしても使用しなければならない場合は上記の手順で使用するのがよいと思います。

（※ピーナインの希釈率は品種や栽培環境・生育の勢いなどにより変わってきます。目安です）

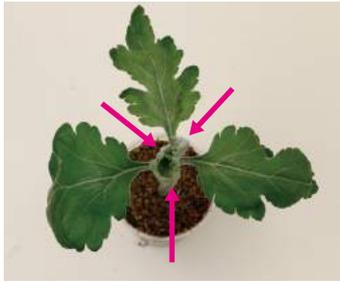
展開葉5～6枚を目安にサシ穂を調整する

旧来は展開葉3枚をつけてサシ穂は調整するのが一般的であったと思います。
しかし、現在では5～6枚つけて調整する方が増えています。

その理由は葉っぱの光合成により作られた栄養分が発根を助成すると考えられているからです。

その証拠に葉っぱの下側に根が出やすい。
このことを考えると、葉っぱを多くつけてサシ穂を調整することは発根が早く片根になりやすく、根量が多い為、優良苗づくりには有効な方法であると考えます。

展開葉 3枚の場合



矢印(葉のない)部分は発根が遅れる。

5～6枚の場合



葉に隙間が無い為平均に発根する。



ポット挿し 完成品

サシ終わってから、発根するまでの管理 … 水掛け・日除け・置く場所

サシ芽が終わった後の水掛けはタップリと掛け、隙間無くサシ穂と土を密着させ落ち着かせます。

その後の水掛けは極力少なくします。

“10日間（発根するまで）は絶対に水は掛けるな”
こんなことも言われているようです。

これは土の量の多い（＝水の量も多い）箱ザシを前提にしたものであると考えます。ポット挿しの場合は、土の量が少なく（＝水の量も少ない）為に1週間程度で水切れが起きる場合も珍しくありません。葉っぱが萎れ気味であれば、土の乾き具合を見て、水不足が起きていれば水を与えます。ポット（サシ芽箱）を持って確認する。水が残っている場合はハンドスプレーで葉水を与えて様子を見ます。そのまま放置すれば必ず枯れてしまいます。

こんな場合は迷わず水掛けをします。植物が生きる為には水は絶対条件です。

萎れ程度は芽先が少し萎れる程度にとどめることが大切です。茎が大きく曲がるほど萎れさせると発根が遅れ優良な苗にはなりません。

発根直前の萎れ以外は葉がピンと立った状態で発根させることが理想です。

(注) サシ芽から10日くらい発根直前に萎れる場合がありますが、これは正常な萎れです。サシ穂の切り口にカルス（カサブタ）が出来、一時的に水の吸収が制限された為です。

発根が始まるサインですので水の乾き具合を注意深く見る必要があります。発根が始まれば葉はピンと立ち正常な状態に戻ります。

萎れは大敵。苗の品質を大幅に低下させます。

サシ芽後の萎れは発根を遅らせ、サシ穂の腐りを誘発する場合があります。

特にサシ芽直後の萎れは大幅に発根を遅らせ、苗の生長や品質を大きく落とすこととなります。



サシ芽の翌日、朝2～3時間日除けを忘れたサシ芽です。
サシ芽後12日経過していますが、萎れが直りません。



正常な管理のサシ芽

ポット挿しの場合

挿した後はサシ芽箱に並べて管理するのが普通です。サシ芽箱は底面や側面も網状になっている為、空気の流れや、水持ち、水ハケなどのコントロールがしやすい特徴があります。

当社で“おすすめのスリットポット”は底面から側面下部にかけスリットが切っており、空気の流れがよく、内部に空気が入りやすい為、「発根が早い」「根巻きしにくい＝鉢上げの適期に自由度がある」などの利点がありますが、反面、乾きやすい点もあります。そこで“乾き方”を調整する為の工夫が必要となる場合が一般的です。

箱挿しの場合

水分の量が多く元々乾きにくい方法です。乾きやすい場合は、サシ芽箱を重ねて、下段のサシ芽箱にモミガラクン炭を2～3センチ敷き詰め、十分に水を含ませ、重ねて使用する。

下段のサシ芽箱に使用するクン炭等（赤玉を使用する方もいます）は新品を使用することが重要です。古土などを使用した場合は、病原菌が含まれている

サシ芽箱の内側底面に新聞紙を2～3枚重ね、水分を含ませ、その上にポットを並べる方法があります。またポットを並べた後の、空きスペースは、モミガラクン炭を入れ、水分を十分に与えておく。また、新聞紙の代わりにモミガラクン炭を2センチ程度敷き詰め、水分を与えた上にポットを並べるなどの工夫がされています。

何も対策をしないで、ポットをそのまま並べておけば、一週間程度で“水切れ”を起こす場合がありますが、その時“水掛け”で対処する割り切った方法もあります。

場合があり、苗の立ち枯れにより、箱単位でサシ穂を腐らせる場合があります。さらに、サシ芽箱の下には、角材などを入れ、底部を浮かせておくことも病原菌の侵入を防ぐ為には大切です。

わずかな工夫でも病原菌は発生するまで見えませんが、十分な注意が必要です。

サシ芽箱は直射日光を避け、明るい場所に置く



サシ芽が成功するかどうかの問題は、“サシ終わった後の管理”にも深くかかわってきます。

日除けは嚴重にし過ぎれば、発根が遅れてしまい、後々の生育に大きな支障を来します。

また日除けが簡易すぎて、萎れさせてしまっても発根も生育も送らせる原因となります。

さらに風通しが悪く、湿度が高すぎると、下葉の黄化や枯死が起こります。

最悪の場合は、腐敗や病気の発生原因にもなります。

したがって、サシ芽箱を置く場所は、地上 50～60 センチ上げ、直射日光の当たらない明るい所に置くのが基本です。

さらに適度な風通しがあり、蒸し込まないことが、優良苗を作る大切な条件となります。

サシ芽箱1～2箱の場合は、軒下・ガレージなどに置くことで解決できる場合もあると思いますが、量が多い場合は遮光ネット・よしずなどを使い、条件を整える必要があります。

サシ芽に萎れは“大敵”です。

特にサシ終わった直後の萎れは、発根を大きく遅らせる原因となります。（前ページ参照）

液肥を使いさらなる完成度の高い苗づくり

みらい 散布



500g入 成分 2.5-4-2

発根が始まったら 1000 倍にうすめて散布、発根が早まり根量が大幅に増す。生長力の強い健苗となる。

(注) 倍率は厳守

P. グリーン葉面散布



600g入

徒長を抑え、大きめの葉っぱのガッチリ苗、軟弱なサシ穂を「しまり」のあるサシ穂に改善する（サシ穂を採る前に行う）鉢上げ後のリン酸吸収力が強くなり、健全生育をする。

500～600倍で葉面散布で使用する。

こうした資材を使用することで、より充実した生長力の強い、優良苗に育てることができます。お試ください。

お申込み・お問い合わせは

ウチダケミカルコーポレイション

Tel.029-869-1777 Fax.029-869-1666

〒300-4204 茨城県つくば市作谷1711-12 郵便振替 00820-6-96628